

# 日野病院日誌

## —17度目の秋の感慨—

日野病院名誉病院長 玉井 嗣彦



やっと秋めいてきましたが、今年の夏は例年のない猛暑で大変でしたね。皆様、体調管理はいかがでしたか。くれぐれもご自愛の上ご活躍下さい。

私は鳥取大学を定年退職後、鳥取県西部の自治体病院の一つである日野病院に名誉病院長として赴任してから、早くも17度目の秋を迎えました。

今日の医療界をとりまく“改革の嵐”の中では、“待ちの医療”からの脱却や、“癒しの医療”の構想は、私に関係した3人の歴代の堀江 裕、浜副隆一、檀田 豊前病院長に引き続いて孝田雅彦現病院長の目標で、その実現に向って関係各位がこぞって努力してきたところです。

人は年齢を重ねるほどに、生きているうちは元気でいたいという思いが強くなるのは当然ですが、あわせて多くの友人、同僚、家族とともに、共に生きる喜びを肌で感じたいと思うものです。

私は、105歳までお元気で東京・聖路加国際病院の名誉院長として活躍しておられた日野原重明先生（去る7月18日、ご逝去）が、2000年に設立された「新老人の会・鳥取支部」の会員でしたので、時々お会いする機会がありました。その際、ご本人はいつも「しんどいけどな、仕事があるから幸せなんだ」と、その都度5年先のスケジュールが一杯書かれた手帳をかざして、我々を鼓舞して下さいました。

① 70歳になれば、新しいことを創める、また腹七分目に、② 80歳になれば、よく歩き、若い者と好んで接する、③ 90歳になれば、心の思うままに生きる、④ 100歳になれば、よい友を持ち、わがままに生きる—これが先生の人生訓でした。

医療従事者としての立場からしますと、日野原イズムは、現場で患者さんと「苦しみや治る希望、喜び」を分かち合えるように、「勇気を持って老後の生き方を選ぼう」と呼びかけておられたようです。

「敬老の日」も過ぎましたが、今生まれた人が介護などを受けずに自立して何歳まで過ごせるかを示す健康寿命の平均値は、日本が男女とも世界最長（2013年）で、女性74.21歳、男性71.91歳と報告されています。

今日まで、この傾向に大差はありません。しかし、最近健康寿命を損わせる危険因子の一つに「視力障害」があることをスタック博士らは、文献的考察により指摘しています。

すなわち、視力障害を有するグループでは認知機能が低いこと、心理的な負担、うつをも増加させることなどが報告されており、健康寿命の維持、延長のためには、視覚が重要な鍵となるといっても過言ではありません。

見えにくい視力（ロービジョン）は、世界保健機関（WHO）の基準では、「矯正視力が両目で0.02以上0.3未満」と定義されていますが、実際にはまだ確立されていないのが現状です。日常生活で、本人が視覚的に困難さを感じたときが、ロービジョンケアの対象者になると考えられます。

今や私が専門とする眼科診療は予防や治療だけでなく、高齢者の要介護状態になるのを防ぐためには、従来の受け身の医療から、成人眼科検診の充実など能動的姿勢に転換することが求められています。微力ながら、努力したいと思います。